

## 第二百三十話 一躍ヒーローに“のらくろ”

硬い話ばかりでは肩も凝る。戦前の子供にとってのヒーローは、“のらくろ”であろう。“のらくろ”について管見する。

### 1 誇るべき日本文化 漫画

漫画は、日本が誇るべき文化であり、大きな娯楽の一つでもある。近年では海外にも輸出されている。大人の娯楽であった漫画が、「のらくろシリーズ」や「冒険ダンキチ」で子供達を虜にした。当時の少年の遊びは兵隊ごっこ、女の子は看護婦ごっこであり、「のらくろ」は一躍子供たちのヒーローとなった。街頭紙芝居の「黄金バット」も同様である。

### 2 のらくろ の概要



漫画「のらくろ」シリーズは、少年倶楽部に1931年1月号から連載され、忽ち子供たち大人気となった。「のらくろ二等卒」を皮切りに1941年秋、印刷用紙節約のため、100万部を超えた部数削減を図るために内閣情報室が執筆中止措置をとった。戦後には、雑誌「丸」に探偵の物語として連載され、1981年の「のらくろ喫茶店」が最後となった。斯様に、一時中断はあったものの、約50年間にわたり掲載された超ロングセラー漫画である。執筆者は、江東区生まれの田河水泡（本名：高見澤仲太郎）（1899～1989）である。

物語は、以下の通りである。『ノラ（野良犬・孤児）の黒犬・のらくろ（野良犬黒吉）が、「猛犬聯隊」という犬の軍隊へ入営する。最初は二等卒（二等兵）としてドジ、オッチョコチョイなところも見せたが、やがて華々しい活躍によって徐々に階級を上げ、最終的に大尉まで昇進し、退役する。自分の境遇にもめげず、明るく楽しく元気よく出世していく姿に当時の子供達は愛情を込めて応援したという。孤児ゆえの辛さを描写することもあるが、田河はこの辺りの描写を自分自身と重ね合わせたという。ブル聯隊長、もしくはモール中隊長が父親的な役割を演じている。戦闘描写はあるがほとんど誰も死なない。』

『因みに、猛犬連隊は、山猿、ゴリラ、チンパンジー、豚軍と戦い、象狩り、カップパ征伐、蛙討伐、熊退治等の作戦を行う。当時の国際情勢を反映してか、戦いの相手は大陸に棲んでいるとの架空世界を設定している。

“のらくろ”は単純な戦意高揚の読み物ではない。あくまでも子供が読む楽しい漫画をとの作者の意図が見事に表現されている。シリアスさは少なく、ギャグ、笑いを前面に出し、機知を駆使し、明るく前向きな“のらくろ”に多くの子供達が共感しただろうと思われる。最近の劇画と違ってどぎつさもなく好ましい。



### 3 若干のコメント

- ・ 当初、“のらくろ”を少佐に昇進させるつもりだったが、軍を愚弄するのなどの苦情があり、やむを得ず大尉で除隊させた。別説では、少佐になると偉くなりすぎて前線にはやたらに出せず、動かしにくい。軍部には、“のらくろ”を批判する意見が多かったといわれる。日本人の生真面目さが如実に出ているようだ。国民の中に余裕が失われつつあったのだろうか？
- ・ 日米戦を控えて、用紙節約のためとはいえ、中止に至ったことは残念だ。一服の清涼剤になったものと思わざるを得ない。

- 4 “のらくろ”について、もっと知りたい方は、江東区森下文化センター「田河水泡・のらくろ館」（H11開設）を訪ねるとよい。

（了）